

# アイナベル・リンジーと 草創期の黒人ソーシャルワーカー養成教育

西 崎 緑

## はじめに——本稿の背景と問題の所在

19世紀末の急速な工業化は、北部を中心に巨大都市を出現させ、移民労働者や都市下層の生活問題を表出させることとなった。この急激な社会変動に伴う不安定な社会状況を制御するための一つの方法として、また続々と生み出される生活困窮者の支援方法として、ソーシャルワークは注目され、体系化されていった。その過程では、まず、それまで展開されてきた宗教的・人道的動機から発生した慈善活動や、社会改良を目指すセツルメント運動の豊富な実践経験をもとに、効率的な手法が編み出された。さらに、経済学、政治学、社会学によって得られた知見を活かした科学的手法が取り入れられた。そして、それを現場のワーカーに訓練し、伝授するため、講習会が開催されるようになった。

20世紀に入ると、精神分析理論を取り入れた精神医学ケースワークが病院や大学との関係を密接に持ちながら展開されるようになり、専門職ソーシャルワーカーの養成訓練も講習会ではなく、1年間の訓練プログラムとして実施されるようになった。しかし1915年、全国慈善・矯正会議において、エイブラハム・フレクスナー (Abraham Flexner)<sup>(1)</sup> が、「ソーシャルワークは専門職か？」と題する記念講演を行い、特定の対象、技術、専門知識を有しないことを理由として、ソーシャルワークは専門職ではないと結論づけたため、専門職としての地位確立をめざすソーシャルワーカーたちに大きなショックを与えた。そのため、ソーシャルワーカー養成教育は、理論的高度化をめざすこととなり、大

学の正規教育、もしくは大学院の教育として、ケースワークを中心に実践と理論の相互関係を持ちながら発展していった。

このケースワークを中心としたソーシャルワークの発達、ヨーロッパからの移民に対しては、アメリカ社会における生活や労働を訓練するためには役立ったと言える。しかし人種差別を原因とする社会問題に対しては、十分に対応することができなかった。例えば、白人のソーシャルワーカーが持つ価値観は、北部のWASP家庭を理想とし、家族関係や道徳、労働倫理もそれに基づいていた。ところが黒人は、単身または母子家庭であることが多く、その上、人種差別のために不安定就労を余儀なくされていた。その彼ら、特に南部出身者の支援にはソーシャルワークが有効とは言えなかった。

さらに、都市の劣悪な生活環境を、公衆衛生運動や消費者運動、児童労働の禁止や女性労働者の保護など一連の社会改良運動によって改善しようと努力していたセツルメントの関係者たちも、人種問題を総論的には取り上げることがあっても、実践には消極的であった。それは、セツルメントを利用する白人クライアントが、黒人と同様に取り扱われることを嫌う場合が多かったからである。そのため、セツルメントも人種別に設置され、通常は黒人のほうが劣悪な対応を受けていた。

本稿では、黒人によるソーシャルワークの歴史研究の一環として、歴史的黒人大学であるハワード大学社会事業学校を、その創設から30年にわたって率いてきたアイナベル・リンジー (Inabel Burns Lindsay) に焦点をあてて、彼女のソーシャルワークに対しての考えや思想、そしてソーシャルワーカー養成教育に対する考えを明らかにするとともに、なぜ彼女がそのような考えを持つことになったのか、黒人が置かれた人種差別の社会状況、さらには女性の社会進出と差別的取扱いの関係を考慮しつつ読み解くこととする。

## 1 黒人大学におけるソーシャルワーカー養成教育と ハワード大学社会事業学校の歴史

ここでは、まず、ソーシャルワーカー養成教育の発達と、黒人の社会事業を特徴づける機関である都市同盟を概観した上で、ハワード大学社会事業学校の位置づけを行う。

### (1) 20世紀初期のソーシャルワーカー養成教育とそのカリキュラム

アメリカにおいてソーシャルワーカー養成教育が本格的に行われたのは、1898年夏にニューヨーク市慈善組織協会が開催した6週間の夏季講習からであった<sup>(2)</sup>。この夏季講習は、1904年秋には1年コース、さらに1911年秋には2年コースとなり、1918年にはニューヨーク社会事業学校と命名された<sup>(3)</sup>。同じ時期、ボストン、フィラデルフィア、ボルティモア、シカゴ、セントルイスでも、ソーシャルワーカーの養成訓練学校が次々と設立されていった。これらとは別に、中西部のオハイオ州立大学、インディアナ大学、ミネソタ大学などの州立大学においても、学部レベルの社会事業教育が開始されていった〔Bruno : 142〕。

ソーシャルワーカー養成教育は、当初各校が独自のカリキュラムを設定していたが、1919年には、専門職ソーシャルワーカー訓練校協会（Association of Training Schools for Professional Social Workers）、すなわち後のアメリカ社会事業学校協会（the American Schools of Social Work）、が設立され、やがて全国の社会事業学校のカリキュラムの統一が図られていくようになる。

エドワードT. デイヴァイン（Edward T. Devine）らを中心に設立、運営されたニューヨーク博愛事業学校（New York School of Philanthropy、社会事業学校の前身）のカリキュラム（1915年時点）<sup>(4)</sup>を見ると、ソーシャルワーク、社会法制、実習、児童福祉、遊戯及びレクリエーション、公的扶助サービスと

その管理、少年非行、医療ソーシャルサービス、セツルメント及び社会センター、産業問題、教会ソーシャルワークとなっていた〔西崎：16-18〕。

一方、グラハム・テイラー（Graham Taylor）らを中心として運営されていた1年コース（3学期間）のシカゴ市民博愛学校（the Chicago School of Civic and Philanthropy）では、社会状況と市町の組織、社会調査法、調査実習、人道主義機関、救済の原則と方法、児童の公的ケア、公衆衛生の基準、社会発展の身体的・精神的要素、産業組織と関係、公教育における社会教育、ソーシャルワーク関連法が教授されていた〔西崎：18-19〕。おおまかにいえば、設立母体や教授陣、さらに実習先、就職先の差から、ニューヨーク社会事業学校は、慈善組織協会で働くソーシャルワーカー、シカゴ市民博愛学校は、セツルメントワーカーを養成することを念頭にカリキュラムが組まれていたと言っ

てよい。

ただし、この特徴がソーシャルワーカーの間での対立を生み出したと早急に結論づけることは誤りである。たとえば本稿でとりあげるアイナベル・リンジーは、当初、ニューヨーク社会事業学校（2年コース）で訓練を受け、民間社会事業機関におけるケースワーカーとして勤務した。その後、シカゴ大学社会サービス運営管理学校（the School of Social Service Administration、シカゴ市民博愛学校の後身）で修士号を取得した。彼女の例からもわかるように、ソーシャルワーカー自身が各学校の特徴を踏まえつつ、自らのキャリアを進める過程で、求める専門的知識や技能の内容や居住地の地理的制約に応じて教育・訓練を選択していったと考えられる。

## （2）全国都市同盟（NUL）と歴史的黒人大学<sup>(5)</sup>の社会事業学校

前項で見たように、20世紀初頭、北部都市を中心に発達した社会事業学校から次々と専門職ソーシャルワーカーが輩出され、主として民間社会事業機関に送り込まれていった。しかし、そこでは黒人の生活困窮者が白人の生活困窮

者と同等に取り扱われたわけではなく、救済を拒否されることさえあった<sup>(6)</sup>。また、黒人ソーシャルワーカーが白人の生活困窮者の支援に携わることもできなかった。従って黒人ソーシャルワーカーは、黒人向けの機関やセトルメントで勤務するか、自分たちで慈善組織やセトルメントを作って活動してきた。

社会事業学校の入学については、表面上、人種隔離は行われておらず、黒人と白人の学生は、ほぼ同じ条件で入学できた。黒人学生たちは、卒業後ソーシャルワーカーとなり、北部都市に急速に流入する黒人の生活問題に対応することとなった。一方、強固な人種隔離が制度化された南部では、社会事業を担うソーシャルワーカーの養成機関がなかった。そこで南部の黒人ソーシャルワーカー養成は、1920年以後、歴史的黒人大学や全国都市同盟（NUL）との密接な関係を持ちながら発達することとなった。

ここで一旦、南部諸州における人種隔離制度について概観した上で、黒人のための社会福祉サービス機関である全国都市同盟（NUL）の設立までの歴史を見る。慣習的人種隔離は、19世紀に進行してきたが、少なくとも1880年代半ばまでは、鉄道における人種隔離は強制されてはいなかった。ところが1901年までに南部9州において鉄道の人種隔離が法制化されて以来、次々と日常生活場面での人種隔離が法制化され、州法に拘束されない連邦政府の機関においても、人種隔離が実施されていった。五月雨式に人種隔離法制度が進んでいった背景には、連邦最高裁の1896年のプレッシー対ファーガソン判決（163 U.S. 537 (1896)）によって人種隔離に合憲性が認められたことがある。以後、半世紀以上に渡り、この判決によってもたらされた「分離すれど平等（Separate but Equal）」原則が、人種隔離の合法性を担保することとなった〔Levine : 115〕。

連邦最高裁は、「分離すれど平等」原則の前提として、黒人に対しても白人と同等の施設やサービスを提供することを要求していたが、南部の現実の中では、黒人は従属的地位に留められた。その社会のおきてに反した者には、白人

群衆によるリンチ殺人（私的制裁殺人Lynching）が待っていた〔Levine：116-118〕。2015年現在の最新のデータでは、1877～1950年に3959人の黒人がリンチによって殺されたと言われている〔Equal Justice Initiative: 15〕。この暴力は、黒人社会全体にも向けられ、数々の人種暴動と排斥活動を引き起こした<sup>(7)</sup>。

1908年8月14-15日に勃発したイリノイ州スプリングフィールドの人種暴動<sup>(8)</sup>を契機として、1910年5月、全国有色人種地位向上協会（National Association for the Advancement of Colored People, 以下NAACP）が前アメリカ弁護士協会会長モアフィールド・ストーリー（Moorfield Storey）を代表として、ニューヨーク市で設立された<sup>(9)</sup>。NAACPの目標は、社会生活上のすべての部面での人種平等を実現することであった。具体的には黒人に法による保護と選挙権を与えるよう政府に働きかけ、後には、裁判闘争を行っていった。

一方、同じく1910年には、南部から流入する黒人の経済的地位向上と就労支援及び労働条件向上を目的に、都市における黒人の状況についての委員会（Committee on Urban Conditions Among Negroes, 以下CUCAN）が設立された。これは、白人篤志家ルース・ボールドウィン（Ruth Standish Baldwin）<sup>(10)</sup>と黒人社会事業家ジョージ・ヘインズ（George Edmund Haynes）<sup>(11)</sup>の協力によって、ニューヨーク市に設立された団体である。翌1911年には、CUCANを含む3つの団体<sup>(12)</sup>が合併し、都市における黒人の状況についての全国同盟（National League on Urban Conditions Among Negroes）が設立された。この団体は、第一次大戦前後から北部に移住した黒人<sup>(13)</sup>に仕事を紹介し、女性保護を行い、住宅や地域の改良、消費者保護、労働問題の解決等に大きな役割を果たした。そして1920年に全国都市同盟（National Urban League, 以下NUL）と改名された。20世紀前半の人種隔離の中で、黒人社会の社会資源の充実のため、NULは、ソーシャルワーカー養成に大きくかかわっていくことになる。

NUL以外にも、科学的慈善や地域改良事業の取組が、大学の社会学や経済

学の講義において行われた。有名なものとしては、アトランタ大学におけるW.E.B.デュボイスを中心とした社会学研究シリーズがある。また歴史的黒人大学の中でもトップと言われたハーワード大学<sup>(14)</sup>では、1910年代から経済学や社会学の講義の中で、社会問題や社会事業に関する内容が見られた。これは、学芸学部長のミラー教授 (Professor Kelly Miller)<sup>(15)</sup> によって組まれたカリキュラムに取り入れられたものである。例えば、1914-15年の授業概要 (Catalogue)<sup>(16)</sup> を見ると、ミラーの担当した科目の説明として「a.社会進歩理論, b.現実的社会問題, 今日社会問題について特に学ぶ」(p.66), 「社会統計学と社会福祉—このコースの目的は、(1) 社会現象を統計学によって読み解く能力を取得すること, (2) 社会調査の実習を経験すること, (3) すべての社会階層と触れ合い、彼らの生活を向上させる仕事の訓練を実地に受けること」(p.66) という説明がなされている。1915-16年の授業概要には、ウェスレー講師担当の教育社会学の授業において、A.教育の社会関係 (教育社会調査や社会生活に関連する教育理論), B.教育と現代社会問題, C.農村学校問題, が取り上げられており、今日の地域福祉の授業内容が家庭や地域における児童の生活と教育の問題を通して教授されていた [Catalogue : 87]。

20世紀始めには、社会学を基礎に社会事業を取り入れたプログラムが他の歴史的黒人大学でも実施された。例えば、テネシー州ナッシュヴィルのフィスク大学では、1910年、NULの創設者の一人であるジョージ・ヘインズ (George E. Haynes) をニューヨークから招聘し、社会学部とソーシャルワーカー訓練センター<sup>(17)</sup>の担当をまかせた。フィスク大学でこのようなプログラムを開始したのは、当時、南部の工業化の進展とともに、黒人が農村から南部の都市に続々と移住してきたため、ナッシュヴィルでも都市貧困層の問題が深刻になっていたからである。

その後、1920年代には、黒人を対象としたソーシャルワーカー養成教育は、社会事業学校の形をとって行われるようになった。例えば、1920年にNULの

肝いりで始まったアトランタ社会事業学校（後のアトランタ大学社会事業学校）や、1925年にノースカロライナ州ローリーにアメリカ聖公会女子部のバックアップによって開設されたビショップ・タトル社会事業学校<sup>(18)</sup>は、その典型である。

### (3) ハワード大学社会事業学校の設立

ミラー教授によって早くからソーシャルワーク的要素が取り入れられていたとは言え、1920年代のハワード大学は専門職養成プログラムに関心を持っていなかった〔Logan : 368〕。それは、経営陣が教養部の充実に力を入れていたためである。例えば、1930年にハワード大学女性部長ルーシー・スロウ (Lucy Diggs Slowe)<sup>(19)</sup> が、学長に対して「30人以上の女子学生がソーシャルワーカー養成教育を受けたいと申し出ている」と報告し、養成プログラムの設立を提案したが、理事会はそれを全く取り上げなかった〔Crew : 368〕。ところがそれからわずか5年後の1934年にフランクリン・フレイジャー (E. Franklin Frazier)<sup>(20)</sup> が社会学の教授として赴任する頃には、理事会もソーシャルワーカー養成プログラムの設立に積極的評価を下すようになっていた。無論、ハワード大学社会事業学校の設立にはフレイジャーの尽力があった<sup>(21)</sup> と言えるが、黒人を含むアメリカ社会全体を席卷するニューディール政策の巨大な力が追い風となっていたことが大きかった。特に公的扶助機関に勤務する専門職ソーシャルワーカーの養成が急務となっていたこと、都市居住者の生活支援がハワード大学の使命として受け入れられやすかったこと、が理事会の決定に影響を及ぼしていたと言える〔Logan : 368〕。

ハワード大学社会事業学校の生みの親であるフレイジャーは、社会事業教育とも無縁ではなかった。彼は、ラッセルセイジ財団の研究助成金を得て、ニューヨーク社会事業学校に客員研究員として籍を置いたのち、1922年、設立間もないアトランタ社会事業学校の校長となった。このアトランタ社会事業学校は、



NULの強力な支援のもと、南部で初めて黒人ソーシャルワーカー養成のために設けられた社会事業学校である。在任中、彼は、カリキュラムの整備、アメリカ専門社会事業学校協会の加入申請を行うなど、アトランタ社会事業学校の教育水準向上に多大な貢献をした。しかし1927年に発表した論文「人種の偏見の病理 (The Pathology of Race Prejudice)」を機に、理事会から「危険な黒人」と見られるようになり、同年、その職を解任された。その後彼は、シカゴ大学で博士号を取得し、テネシー州のフィスク大学で教鞭をとっていたが、そこにハーワード大学から社会学部の責任者として招聘するという話が持ち込まれたのであった。

1935年にハーワード大学理事会は、「社会サービス」カリキュラムを設置することを正式に承認し、それを受けて、フレイジャーが監督する社会学部においてソーシャルワークの授業が始まった。このときのソーシャルケースワークの担当講師は、マイラ・コルソン・コーリスとセイディー・グレイ・メイズ（どちらもハーワード大学教授の妻）であった。彼女らの学問的背景は定かではない。その後、約5年間にわたり、フレイジャーは、ほぼ単独でハーワード大学社会事業学校のためにカリキュラム整備を行った。その過程で、1937年、フレイジャーは、アイナベル・リンジーをハーワード大学に呼ぶこととしたのである。

ハーワード大学がソーシャルワーカー養成プログラム設立を進めていた当時、北米の社会事業学校は、大学院レベルの養成教育という段階にきていた。フレイジャーがアメリカ社会事業学校協会に養成校としての加盟承認を申請した1937年は、まさにその移行過程の時期であった。加盟校になるための条件の一つに、ソーシャルワークの専門家として認められるような人物を常任の責任者に据えなければならない、ということがあり、それを満たすためには、フレイジャー以外の人物で資格要件を満たす者がいなければならなかった。アイナベル・リンジーは、まさにその資格を満たす人物であったのである。

## 2 アイナベル・リンジーとハワード大学社会事業学校の運営

そこで次に、ハワード大学社会事業学校草創期の実質的指導者であるアイナベル・リンジーが如何なる過程を経て、ハワード大学社会事業学校の校長となり、また彼女がハワード大学社会事業学校に残したものは何だったのか、について見ていくこととする。

### (1) 黒人ソーシャルワーカーのパイオニア、アイナベル・リンジー

アイナベル・バーンズ (Inabel Burns) は、1900年ミズーリ州ブキャナン郡セントジョセフ市で、兄3人、姉2人<sup>(22)</sup>の6人兄弟の末っ子として生まれた<sup>(23)</sup>。3歳のとき、彼女の両親は離婚し、同居する曾祖母と祖母によって育てられた。このような環境であったが、彼女の家は極貧層という訳ではなく、専門職も輩出している。例えば彼女は、子どもの頃、一度彼女の姉の家でデュボイス<sup>(24)</sup>に豪華な夕食を世話したという思い出も語っている<sup>(25)</sup>。このような家庭の中で、彼女は、常に家族の注目を浴びて育った。それは、すぐ上の姉が彼女より8歳も年上であったという理由だけでなく、はしかのために視力低下となった健康上の理由があったためである。

アイナベルの成績は常に良好で、16歳でハワード大学に入学し、教育学を専攻した。当時、彼女の同級生は州立大学に進学した人が多かったが、入学が認められても、黒人の女子学生は大学の学生寮に入ることができなかった。彼女の母親は、自分の娘がキャンパスの外で暮らすことを望まなかったため、知人の医者に勧められるままに女子寮のあるハワード大学に進学したのである。

ハワード大学で最も影響を受けたのは、ウィリアムズ博士 (Dr E.C. Williams) であった。当時、ハワード大学の教授陣は、ほとんど白人であったが、ウィリアムズを含む白人教授陣から、彼女は一人の人間として尊重されたと感じていた<sup>(26)</sup>。1920年に学士課程を成績優秀者として卒業した彼女は、ウィ

リアムズの勧めにより、当時の新しい専門職、ソーシャルワークを勉強するためにニューヨーク社会事業学校に進んだ。

この進学には、ウィリアムズの助けがあった。彼は、成績優秀な学生10～11人をNULに推薦し、ニューヨーク社会事業学校で学ぶ奨学生試験を受けさせたのである。アイナベルは、見事その試験に合格し、NUL奨学生となった。そして、ニューヨークで彼女は、その後の人生に大きな影響を与えることになる2人の人物と出会う。一人は、NULのチャールズ・ジョンソン (Charles S. Johnson)、もう一人は、後に彼女をハワード大学社会事業学校に呼び寄せることになる、フランクリン・フレイジャー (E. Franklin Frazier) である。フレイジャーは、当時すでに修士号を持つ研究者で、ラッセルセイジ財団の奨学金を得てニューヨーク社会事業学校に客員研究員として滞在していた。彼は、年長者として、彼女を含む若い学生たちの面倒を何かにつけてみるようになっていた<sup>(27)</sup>。

ところで、アイナベルが学んだ1920年から21年のニューヨーク社会事業学校のカリキュラムを見ると、無論、ケースワーク中心、しかも最新の精神分析理論を入れたソーシャルワークが主流となりつつあった。これは、メアリー・リッチモンドを始めとするソーシャルワーク教育の先達たちが、1915年の全国慈善・矯正会議で、フレックスナーに「ソーシャルワークは専門職とは言えない」と断定されて以来、ソーシャルワークの科学性、専門性をケースワークに求め、発達させてきたからである [Stadum : 36]。

ニューヨーク社会事業学校の生みの親であるリッチモンドは、1917年に刊行した『社会診断 (Social Diagnosis)』の中で「科学的慈善」概念を初めて紹介し、続いて1922年に出版した『ソーシャル・ケースワークとは何か? (What is Social Casework)』では、「ケースから学ぶ」というケースワークの手法を紹介した。また、1921年に結成された専門職団体、アメリカソーシャルワーカー協会 (the American Association of Social Workers) は、「適切な教育訓練を

受けていること」, すなわちケースワークを正規に学習したこと, を協会の加盟条件とした。このように, ソーシャルワーカー各自の働く現場は異なっているけれども, 客観的観察をもとにしたケースワークこそがソーシャルワーク専門職が用いる専門的技法である<sup>(28)</sup>, とする見解が社会事業界では主流となりつつあった。

ニューヨーク社会事業学校時代のアドバイザーのマーガレット・リール (Margaret Leal) についてリンジー自身は, 次のように語っている。「彼女(リール)の体に腕を回したりするなんてことは, 考えられないことだったわ。彼女と気軽に話をすることはできたし, それに対してきちんと応えてもくれたけれど, 彼女は, 客観性を重んじる当時のケースワーク理論にしたがって行動していたの。つまり, クライアントの前では記録をとらないし, クライアントと私的な関係を一切もたない, という原則を貫いていたわけ。当時は, 客観的であることが強調された時代だったから, クライアントと一定の距離を保つ学生を好んでいたのかも知れないわ。」〔Oral History 1979: 40〕。それに加えて, アイナベルの専門的技能の発達に大きな影響を与えたのは, 精神医学ソーシャルワークの専門家, マリオン・ケンウォージー (Marion E. Kenworthy)<sup>(29)</sup>, バーナード・グルーク (Bernard Glueck)<sup>(30)</sup>, ゴードン・ハミルトン (Gordon Hamilton)<sup>(31)</sup> であった。

ニューヨークにいる間, これらの授業では, とりたてて人種差別を感じることはなかったとリンジーは語っているが, 他の学生が住み込むことができたセツルメントに, 自分だけが住み込むことができなかったことなど, 実生活の場面で差別を感じることもあった<sup>(32)</sup>。ただし, その程度の差別は, ミズーリ州出身の彼女にとって, 日常茶飯事のことと解され, 大きな問題であるとは認識されなかった。このような差別よりも, 当時の彼女が最も苦勞したのは, 実習であった。黒人学生たちの実習先は, ハーレムのCOSと決まっていた。アイナベルは, そこで初めて黒人の専門職ソーシャルワーカーと出会う。彼女に言わ

せると、この実習指導者は、「非常に良い人であったが、生意気な女子学生たちをどう扱えばよいのかわかっていなかった」のだと言う。また、実習生にケースの詳細にわたって実習記録を作成することを命じながらも、実習中にクライアントの前でメモをとることを一切許さないなど、厳しい決まりを課していた。そこで彼女は、訪問先のアパートの外の壁に小さなメモ帳を広げて、猛烈な速さでメモをとる、あるいは後で思い出せるように単語を殴り書きするなどしたと語っている。本来21歳以上でなければ入学が許されないニューヨーク社会事業学校に20歳で入学したアイナベルにそれは少し厳しすぎると指導者たちが考えたのか、次の学期の実習は、ブルックリンの少年保護協会に変更となった。そこで母親的な寛大な指導者に巡りあって、ようやく落ち着いたと彼女は振り返っている〔Oral History 1979：37〕。

ニューヨーク社会事業学校のコースを修了した彼女は、母親の希望<sup>(33)</sup>により一旦ミズーリ州の自宅に戻り、1年間教師として勤務した。その後、カンザス市に移って教師として働く傍ら、スクール・カウンセラー（今日のスクールソーシャルワーカーの仕事も含む）としての仕事も命じられ、さまざまな問題のある生徒の支援を行った。これは、彼女がニューヨーク社会事業学校でソーシャルワーカーの訓練を受けたことを知った校長が命じたためである。彼女は、そこで問題行動のある子どもたちへの対処を経験したことは、後に貧困地区の子どもたちに自信を持たせる仕事をするときに役立ったと言っている〔Crewe：367〕。

1925年、アーネット・リンジー（Arnett Lindsay）との結婚により、アイナベルは、教師としてのキャリアを中断し、カンザス市からセントルイスに移った。夫が旧態依然とした考えの持ち主であったことと、彼女自身が母親となることを希望してため、1年間は主婦でいた彼女も、NULからチャールズ・ジョンソン（Charles Johnson）<sup>(34)</sup>のスプリングフィールド（イリノイ州）調査の助手に任命され、調査を手伝うことになった。当時、第一次大戦でヨーロッパ

に派遣された多数の黒人兵は、南部に帰還した途端、厳しく制度化された人種隔離に大きな失望とストレスを感じていた。また南部の白人たちは、ヨーロッパで「同じアメリカ人」と取り扱われた黒人兵が「生意気」になることを危惧していたため、両者の緊張が高まり人種暴動が頻繁に起きていたのである。そのため、NULは、ジョンソンの社会調査の結果が報告されれば、人種間の緊張が多少なりとも緩和されるのではないかと期待していた。調査報告がその結果を導き出したといえるかどうかは判断が難しいところだが、それが新聞に掲載された後、リンジーには、さまざまな機関から誘いがあった。その中で、彼女は、セントルイス市で最大の社会事業機関であったセントルイス家族サービス協会（the St. Louis Provident Association）を選び、1932年まで専属のソーシャルワーカー及び管理者として勤務した。

ここで彼女は、大恐慌後、急速に拡大する公的扶助を、直接、自らの仕事として経験することとなった。1930年にセントルイス市当局が救済部を設置したとき、市には公的扶助を担当できる職員はいなかった。そこで民間機関のソーシャルワーカーたちに協力を求めたので、彼女も公的扶助ワーカーとして出向することとなった。その経験は、彼女に言わせれば、「刺激的で、職業生活の最も充実した期間」であった。しかしその反面、既存のソーシャルワークに対して大きな失望も味わうこととなった。例えば、彼女の上司は、黒人ソーシャルワーカーで黒人居住区へのサービスの責任者であったが、何でも「ボスの言いなり」で、自らの判断で動こうとはしなかった。リンジーはそれに反発を覚え、「私は、専門職としての専門性や尊厳に合わないことと人種を差別することは絶対にしない」と周囲の人々に語り、次第に人種差別問題に対する解決がまずなければならないと意識するようになった〔Crewe : 367, Cash : 128, Oral History 1982 : 24〕。

また、大恐慌前年の1928年、リンジーは、ニューヨーク社会事業学校での講習を受けるよう勤務先の家族サービス協会から命じられた。これは、毎春、全

国から25の民間社会事業団体が、そこに所属するソーシャルワーカー1～2人を選んで受講させる講習会で、リンジーが受講した年には、40人のワーカーが講習を受けていた。彼女はそこで「現実に目覚める」経験をしたという。例えば、同じ専門職でありながら、彼女は「黒人である」というだけの理由で、他の受講生と一緒にマンハッタン島の南東部の貧困地区<sup>(35)</sup>に寄宿することができなかった。またグループプロジェクトで同じグループになったボストン家庭相談所の管理者の女性は、受講生に課せられた課題をリンジーたちと話し合うことを明らかに避けていた。つまり、リンジーに言わせれば、「ソーシャルワークは、どんな人でも受け入れる、そんなことは疑う余地もないものだと思っていた。しかし（この講習で）ソーシャルワーカーによる人種差別を見せつけられて、私は大いに失望した。」というのである〔Oral History 1979：45〕。

NULの奨学生としてニューヨーク社会事業学校で学んだ20歳代の始めには、明確に意識していなかった人種差別の不当さ、ソーシャルワーク界の欺瞞を、彼女はこれ以降、強く意識するようになる。そして、それを正す必要性をも感じるようになっていく<sup>(36)</sup>。1930年代半ばに修士課程に進もうと考えたとき、コロンビア大学ではなく、シカゴ大学選んだ理由も、単に地理的に近かったというだけではなく、シカゴ大学のほうが、より社会改革的傾向が強かったことがあったのではないかと推察される。

リンジーが修士号を取得したシカゴ大学社会サービス運営管理学校（School of Social Service Administration）は、シカゴ市民博愛学校をその前身としていた。この学校は、1920年シカゴ大学に吸収され、全国初のソーシャルワーク専攻の大学院、社会サービス運営管理学校となっていた。当初、黒人大学院生はほとんどいなかったが、篤志家ジュリアス・ローゼンウォルト（Julius Rosenwald）<sup>(37)</sup>とシカゴ大学教授のソフォニスバ・ブレッキンリッジ（Sophonisba Breckinlidge）<sup>(38)</sup>によって1923年に黒人学生向けの奨学金が授与されるようになったため、黒人大学院生も学ぶことができるようになった。お

そらく、この経済的支援もリンジーがシカゴ大学を選んだ理由の一つであろう。

さらに、市場経済の行き詰まりと、それに対する民間社会事業の無力さが大恐慌によって露呈したこと<sup>(39)</sup>も、従前のソーシャルワークに疑念を持っていた彼女を、より社会改革に近づけたと考えられる。ニューディール政策という壮大な社会実験の中で、シカゴ大学関係者が新しい社会保障法の構想に加わっていたことなどを背景的要素として考えると、シカゴ大学での経験は、リンジーに社会改革の可能性を想起させ、その実践意欲を掻き立てるのに十分であったであろう。

シカゴ大学のプログラムは、ブレッキンリッジやイーデス・アボット (Edith Abbot)<sup>(40)</sup>らが作り上げたもので、社会改革を教育研究の中心に置いていた。リンジーによれば、ブレッキンリッジの授業では、政治哲学がことあるごとに語られ、「社会階層」の問題が頻繁に取り上げられた。また一つの新聞記事から社会構造的に生じる生活問題の過程を解き明かす手法は、リンジーの興味を大いに引いたという。人種問題についても、ブレッキンリッジは積極的に取り上げ、授業中にブラウズヴィル事件<sup>(41)</sup>を例に挙げ、「マイノリティの人々の生活を守るためには、既存の法制度の枠組みを変えなければならない」とブレッキンリッジが言ったことも、彼女の中に強く印象づけられた〔Oral History 1979 : 62〕。

同時に、アドバイザーのシャーロット・トゥール (Charlotte Towle)<sup>(42)</sup>のおかげで、シカゴ大学においても、精神医学ソーシャルワークの学びは続けることができた。当時を振り返って彼女は、「フロイトの精神分析をもとにしたアプローチにどっぷりと浸かった。(中略)ありとあらゆるものを精神分析の対象とし、人間の発達と行動という概念によって読み解いた。(中略)身体と精神の病気を一つ一つ学ぶにつれて、そのどれもが自分に当てはまると思いこみ、自分が病んでいると思ったりしていた。」と言っている〔Oral History 1979 : 41〕。



こうした学びの後、1937年に修士課程を修了したリンジーは、フレイジャーからの誘いを受ける。そして、ハーワード大学でのソーシャルワーカー養成に加入することとなった<sup>(43)</sup>。

## (2) ハワード大学社会事業学校の設立とリンジーの役割

母校のハーワード大学に迎えられた時、リンジーは、37歳になっていた。彼女は、もはや青二才ではなかった。ソーシャルワーカーとしての経験を十分に積み、シカゴ大学の修士課程も修了し、社会改革の意欲に燃えていた。フレイジャーもリンジーも、ハーワード大学においては、社会正義 (Social Justice) を基盤に据えて社会事業学校のカリキュラムを構成すべきだという考えで一致していた。そのため、新しいコースでは、「社会正義」の科目が、当初からカリキュラムの中心に据えられていた。

社会学部の一部としてスタートしたコースであったが、フレイジャーは、当初から大学院レベルの社会事業学校として独立させることを目指していた。そのため、彼は、まず、入学基準を厳格にすることとした [Oral History 1982 : 25]。リンジーの初仕事は、この入学基準づくりであった。彼女は、学業成績と人物評価を用いる基準を次のように具体化した。学業成績においては、学部卒業時に平均でB以上の成績をとっていることを要件とした。それは、社会事業学校の教育内容を理解し、その知識を現場の状況に合わせて応用できるようになるためには、少なくとも一定レベル以上の理解力が必要だったからである。また、推薦状も必須とし、受験生が指導的立場に立てる能力がある人物であるかどうか、人間社会における幸福の実現を目指して日々改善の努力をしていける者であるかどうか、ということを経験状の評価の基準とした。さらに、面接から、他者の苦しみや痛みを想像できる力を持ち、人間一人ひとりの経験してきた生活環境の違いを理解した上で、彼らの持てる力を発揮させた上で共に社会変革に取り組む努力ができる者であるかどうかを判断した<sup>(44)</sup> [Oral History

1979 : 194-196]。

前述のように、ハワード大学は、1920年代から教養学部の実質を目指するという方針を軸に運営されていたが、そのハワードの理事会がソーシャルワーカー養成を認めることになったのは、ニューディールによる公的扶助事業が一気に拡大し、黒人の生活支援を行うソーシャルワーカーの需要が高まったという理由が一番大きかった。その上、ワシントンD.C.の連邦政府機関で黒人に求められる職種の多くが、ソーシャルワーカーとしての訓練や前歴を条件としていたにも拘わらず、黒人が学べるソーシャルワーカー養成校は少なく、ワシントンD.C.には1校もなかったという事情が重なった。事実、ハワード大学卒業生から、社会事業学校開設の要望が大学当局に対して殺到していたのである。理事会の思惑とは別に、リンジー自身は、その機会をとらえて、専門職ソーシャルワーカーの在り方を変えようとしていた。すなわち、彼女に言わせれば、それまでの専門職ソーシャルワーカーは、中流家庭出身者が多かったという事情もあって、専門的教育訓練を受けていても「温情的救済」という姿勢から抜け出すことができなかった。彼女は、『『真の専門性』とは、温情的態度をとらず、本人の尊厳と潜在的能力を重視して必要最小限の援助を見つけ出して実践する力である』と言う。このハワード大学のコースでは、クライアントに対する温情的態度を許さない、という原則が貫かれ、学生に少しでも温情的態度が見られれば、厳しい指導の対象となった〔Lindsay 1967 : 16, Oral History 1979 : 198, History-Howard University School of Social Work〕。

フレイジャーとリンジーのこうした構想が徐々に具体化する一方で、アメリカ社会事業学校協会からハワード大学が養成校として承認されるためには、カリキュラムの整備に万全を期しておかなければならなかった。アメリカ社会事業学校協会は、1935年からアメリカ大学協会 (the American Association of Universities) に所属する大学の一部として設置されている社会事業学校のみが加盟申請を行うことができる、という条件を定めていた<sup>(45)</sup>。さらに1936年

ころから協会は、その加盟条件を、大学院修士課程に引き上げることを検討していたので、学術・教育の質を担保する、ということが承認のための条件として重要性を増していた〔Kendall : 39〕。ハワード大学の場合、経済学や医学などの関連諸科目の講義は、同大学の教養学部や医学部の教員から協力を得ればすむ状態であったが、肝心の専門科目の教授陣が十分ではなかった。ソーシャルワーカーの経験のある専任教員は、リンジーを含めて2名しかおらず、残りはパートタイムの教員であったからである。

それらの条件を満たしてハワード大学から協会には加盟申請がなされたのは、1937年のことであった。翌1938年に協会の審査を受けた時点では、1939年から大学院修士課程を協会加盟条件とすることが決定していたので、ハワード大学社会事業学校の審査は、それを前提として行われた。その結果、社会事業学校としての独立した財政が確保されていること、学校の責任者が明確であること、カリキュラムが大学院修士課程のものとなっていることの3条件が評価され、いくつかの点で改善を求められたものの、1940年に条件付き加盟が認められた〔西崎 : 34〕。リンジーは、この間、1939年に校長事務取扱 (Acting Dean) となり、社会事業学校の運営責任者となった。

その後、1942年からは、大学院社会学専攻から独立した独自のプログラムとして社会事業学校が運営されるようになった。翌年 (1943年)、リンジーは助教授に昇格し、同時に女性として初の専攻科長となった。そして1944年からは、2年コースが開始され、社会事業学校はアメリカ社会事業学校協会が求める、大学院修士課程の学位を単独で授与できる教育プログラムとなった〔Logan : 368, Kendall : 39〕。なお、1935年度 (社会学部での準備期間) から1945年度までのフルタイム学生 (1 四半期に10時間以上授業を履修する者) とパートタイム学生 (1 四半期に平均2教科を履修する者) の数の推移は、以下の表に見る通りである〔Annual Report to the President, 1945-46〕。このうち、第二次世界大戦中から急激に学生数が増加するのは、G.I.Billによって就学の機会を得

表：ハワード大学社会事業専攻在学生数

年次	フルタイム	パートタイム	合計
1935-36	3	23	26
1936-37	4	24	28
1937-38	6	14	20
1938-39	9	20	29
1939-40	16	24	40
1940-41	13	25	38
1941-42	13	23	36
1942-43	19	33	52
1943-44	21	54	75
1944-45	35	30	85
1945-46	47	64	111

再掲〔西崎：34〕

た復員兵が入学したためではないかと思われる<sup>(46)</sup>。

### (3) ハワード大学でのカリキュラムの発展

設立から30年間、リンジーは、常に社会事業学校の運営の中心にあった。リンジーの考えは、次のような言葉に表れている。「ハワード大学のソーシャルワーク修士課程は、(他の社会事業学校で)人種問題についての研究がほとんどなされていない現状を考慮すると、人種という要素に影響を及ぼすような教育研究を行うことが期待される。とにかく、合衆国における黒人の地位に関して具体的に情報を提供する責任を負っているのである」〔Matthews：106〕。

こうした彼女の意欲にも拘わらず、先にみたように、ハワード大学社会事業学校は、ソーシャルワークの専門カリキュラムやそれを担当する教員体制に不十分な点を残していた。それには、当時ハワード大学の学長であったモーデカイ・ジョンソン (Mordecai Johnson)<sup>(47)</sup> がソーシャルワークの専門性を十分に認めていなかったという事情がある。ジョンソンは、ソーシャルワークをクリスチャンの仕事と考えており、「悩める人の相談に乗って、それに適切な導きをすることは、善良なクリスチャンであれば誰でもできることである」と言

うのが常であった。それに加えて、ジョンソンは、男尊女卑の考えも持っていたので、リンジーを社会事業学校の校長として認めた扱いをしたことがなく、彼女の意見は、フレイジャーを仲立ちにして自分の意見を伝えるという状況であった〔Oral History 1976 : 26〕。

そのフレイジャーも、1940年代の始めに社会事業学校を社会学部から独立させるとき、グッゲンハイム奨学金を得てブラジルの家族を研究するために1年間ブラジルに行かなければならなくなった。そこで、リンジーは、アメリカ社会事業学校協会に相談しつつ、カリキュラム整備を行うこととした。協会からは、レオナ・マスス (Leona Massoth) がコンサルタントとして派遣され、標準カリキュラムに沿って、ハワードのカリキュラムのどこを具体的に整備しなおさなければならないかを丁寧に教えてくれたので、社会事業学校のカリキュラムは最後の仕上げをすることができた〔Oral History 1976 : 37〕。

さらに、フレイジャーは、かつてフィスク大学で教鞭をとっていたときの教え子2人を新たにスタッフとして迎え入れた。それによってリンジーの右腕となって働くスタッフが完備されたのである。そのうちの一人、オフィリア・エジプト (Ophelia Egypt) は、後にハワード大学に医療ソーシャルワークのプログラム創設に貢献し、また、黒人家庭が経済的苦境から脱出するためには、家族計画を立てることであると、ワシントンD.C.の黒人コミュニティを説得するなど、地域福祉の発展にも貢献した。もう一人のメアリー・ディグズ (Mary Huff Diggs) は、リンジーもセントルイス時代からよく知っていた児童福祉の専門家であり、児童福祉分野の教育研究をまかせることができた。

少し戻って1938年、ハワード大学理事会は、社会事業の修士号を出すことを承認し、同時にリンジーの契約も更新された。彼女の指導下でさらに社会事業学校のカリキュラムは発展し、1940年には大学院社会事業専攻 (Division of Social Work) が設置され、1943年にはリンジーが専攻科長となった。その後、1944年に社会事業学校が専門職大学院として独立し、2年コースの修士課程と

なった。

専門職大学院としてのハワード大学社会事業学校のカリキュラム（1946年当時）を見ると、必修科目として「ソーシャル・ケース・ワークⅠ・Ⅱ，ソーシャル・グループ・ワークⅠ，コミュニティ・オーガニゼーションⅠ，児童福祉Ⅰ，公的扶助Ⅰ，社会調査，人間の成長と発達Ⅰ・Ⅱ，精神医学Ⅱ，ソーシャルワーク・セミナー」があり，追加科目として，家庭福祉専攻，児童福祉専攻，医療ソーシャルワーク専攻，精神医学ソーシャルワーク専攻ごとに設定された科目があり，さらに選択科目として「少年非行，文化・行動・人格，社会保険，ソーシャルワークの法的側面，労働問題，ソーシャルワークにおける人種的・文化的問題，社会保障入門，社会福祉の適用」があった。なお，これらの科目とともに，最低1300時間の実習が設定されており，1年目は，週3日実地指導を受けることや，最低1学期間ケースワークの実習に従事したのちに各専攻の実習を行うことという条件が課されていた〔西崎：35-37〕。

ハワード大学社会事業学校のカリキュラム整備がほぼ終わった1940年代後半，社会事業界では，専門職の量的拡大と質的担保が公私社会事業の大きな課題となっていた。それは，連邦政府が関与する社会事業の範囲が戦後飛躍的に拡大し，十分な訓練を受けていないソーシャルワーカーが特に公的扶助の分野で救済業務に従事するようになったからである。1940年国勢調査では，全国のソーシャルワーカー数は，約70,000人であったが，1948年の国連続計（未公開）によれば，その数は，100,000人となっていた。また労働統計からソーシャルワーカー数を確定した一番ヶ瀬によれば，1950年のソーシャルワーカーの数は75,000人とされている〔Hollis 1949：Reprint 18，一番ヶ瀬：267〕。

急激な増加を背景として，1948年から本格的に検討された社会事業学校のカリキュラム指針は，1951年のホリス＝テイラー報告として発表され<sup>(48)</sup>，以後，学士レベルでの専門職養成と修士レベルでの専門職養成の標準カリキュラムが整備されることとなった。こうした動きの中心であったのは，専門職団体であ

る全米ソーシャルワーカー協会（the National Association of Social Workers）と、専門社会事業家養成校の団体である社会事業教育協議会（the Council on Social Work Education, 以下CSWE）である。CSWEは、修士レベルの養成校の団体であるアメリカ社会事業学校協会（the American Association of Schools of Social Work, 1919）と、ニューディール以後の公的扶助ワーカーを養成する学士レベルの養成校の団体である全米社会運営学校協会（the National Association of Schools of Social Administration, 1942）が統合されたものであり、1952年1月28日に統合される以前から、両者は密接な協力関係にあった。

ホリス＝テイラー報告は、全国の養成校を震撼させるものであったが、後進のハワード大学はすでに厳しい基準をクリアしており、ハワード大学にとっては、その教育の質の高さが世に知られるという幸いな結果となった。さらにリンジーは、セントルイス時代から、アリス・テイラーと既知の仲であり、この報告書が出た時点でテイラーをハワード大学社会事業学校の教員として迎えていた。連邦政府の福祉国家政策が本格的に進められた1950～60年代には、首都ワシントンD.C.に存在するという地理的条件と、社会事業界におけるリンジーの幅広い交友関係によって、ハワード大学社会事業学校は、社会保障局勤務のアリス・テイラー、その夫の保健教育福祉省マイケル・ディヴィスを始めとする連邦政府の福祉関係者から直接、最新の情報をもとにした講義を受ける機会を提供できたのであった〔Oral History 1979：210-211〕。

### 3 まとめにかえて

#### ——社会変革をめざすアイナベル・リンジーへの抵抗と攻撃

以上、ハワード大学社会事業学校の草創期において、その中心となって率いてきたアイナベル・リンジーを中心に、黒人ソーシャルワーカーの養成の内容

と社会的環境を見てきた。ハワード大学社会事業学校は、フレイジャーが種をまき、リンジーが育てた。この時代、アメリカ社会は、大きな社会変革を経験し、その中で翻弄される黒人コミュニティを眼前にし、彼らは人種問題を避けて通れないと痛感していた。そこで、黒人ソーシャルワーカー養成教育においては、黒人の尊厳を守り、生活を向上させるため、黒人の置かれた社会文化的背景を強調するカリキュラムを整備したのであった。

リンジー個人としては、専門職ソーシャルワーカーとしての経験を積む過程で、人種差別の不当さとソーシャルワークの欺瞞に気づき、社会変革と自己変革をめざすソーシャルワークの実現が必要であると考えていたに違いない。1952年、リンジーは、ピッツバーグ大学での博士課程を修了し、博士の学位を取得した。彼女の博士論文は、「1865-1900年における福祉サービスの基盤設立についての黒人の貢献：ワシントンD.C., メリーランド州, ヴァージニア州の事例を中心にThe Contributions of Negroes to the Establishment of Welfare Services: 1865-1900, with Special Reference to the District of Columbia, Maryland, and Virginia」と題したものであった。彼女がその中で主張したかったことは、ソーシャルワークの歴史に黒人の貢献があったということである。「ジェーン・アダムズとエレン・スターがハル・ハウスという偉大な冒険を始めたとき、同世代の若い女性がヴァージニア州ハンプトン市の貧困黒人児童の世話をするために、新婚家庭を開放して事業を始めた。1889年、ジャーニー・ポーター・バレット (Mrs. Janie Porter Barrett) が、通りで遊んでいた貧困な黒人少女たちのために、クラブを作ったのである。」〔Lindsay, 1956: 23〕と彼女は言っている。

リンジーはまた、社会事業界でも大きな発言力を利用して、人種を超えたソーシャルワークを展開するよう意見を述べている。彼女は、全米社会事業会議、全米ソーシャルワーカー協会などの理事や委員長をも務め、さらに全米社会福祉協議会 (the National Social Welfare Assembly以下NSWA)<sup>(49)</sup> の設立メン



バーとしても活動し、機会があるたびに人種差別解消に向けての発言を行った。例えば、NSWAには、前身の全国社会事業協議会には参加していなかった全国都市同盟も加わり、設立時から人種統合が意識されていた。例えば1946年4月29日に開催された結成記念の昼食会で、ハワード大学社会事業学校長アイナベル・リンジー (Inabel B. Lindsay) は、「私は、アメリカ最大のマイノリティグループの代表であるとともに、専門社会事業家としてここにいる (中略) すべてのアメリカ人は、人々の福祉について責任を分かちあうべきである。みなさんがご存じのようにアメリカの最大のマイノリティグループは、深刻な問題を抱えている。その問題は、多くのアメリカ人の問題である。私たちは、マイノリティグループであることよりもアメリカ人であることを第一に考えるべきである」<sup>(50)</sup>と述べ、社会福祉の実現のために全員が黒人の課題をも共有すべきであることを強調した。

こうした公的発言は、1950年代の赤狩りが始まると、危険視されることにもなった。朝鮮戦争を契機とする冷戦の到来によって、アメリカ社会は共産主義に過敏になっており、社会変革をめざすソーシャルワーカーたちも、下院議員ジョセフ・マッカーシー (Joseph McCarthy) 率いるFBIまたは連邦下院の反アメリカ活動調査委員会による調査の対象として、厳しい追及に曝された。ソーシャルワーカーを含む多数の人々が、ニューディール政策に協力したこと、FBIに疑われた組織のメンバーであったこと、革新的雑誌へ投稿したこと、社会主義の書籍を所有していたこと、そして公民権運動に関わったこと、などという理由で、公職を追われた。リンジーも危険人物とみなされ、ハワード大学は、リンジーを退職させるように迫られた。しかしこの時は、ジョンソン学長が頑として拒否したため、その地位は保全された。リンジーは、おそらく、有名で尊敬される黒人教育者であったことから、マッカーシーたちに狙われたのではないかとされている [Reich and Andrews: 88, Oral History 1982 : 156]。

この時代のもう一つの闘いは、女性差別の克服と解放であった。1848年セネ

カ・フォールズで開催された女性の権利獲得のための会議を機に、社会的、政治的、経済的地位平等を求めて女性運動が展開されてきたが、1910年代には、女性が社会で職を得る時代が到来し、両親の監視下から女性が解放されつつあった。リンジーがハワード大学で教育学を学ぶ学生であったころ、婦人参政権獲得運動はピークを迎えており、リンジーも他の女子学生とともにそれに参加した。1920年によりやく婦人選挙権が認められ、19世紀末からの運動が結実したが、そこにも黒人の排除があり、黒人女性たちを失望させることとなった。

自立する女性の職業として人気があった専門職ソーシャルワーカーも、公私の社会事業機関では、男性の上司の下で働く補助的業務とみなされることが多く、専門性を身に着けていても女性の給料は男性より低かった。リンジーが当初「臨時の」校長に任命されたことも、由緒あるハワード大学という世界が男性中心で運営されていたことによる。

彼女は、学長のジョンソンとの関係をこのように振り返る。「モーデカイ(ジョンソン学長)は、女性の校長(後に専攻科長)に対して、『父親的態度』でやってきたの。(中略)彼は、一度も私のことを校長と呼ばなかったし、いつも『娘よ』と言って、肩をたたいたりしていたのよ。(中略)娘よ、お前はまだ若いのだから、そんなに焦らないで。何事にも時間がかかるんだよ。そんなわけで、私がお願いした年には予算措置はされず、翌年に望みが叶うってというような調子だった。つまり、彼は、私の言うとおりにしただけなのよ。(中略)多分、彼が考える女性の位置というものは、私が考えるものとはずいぶん違っていたのだと思う」〔Oral History 1982: 31-33〕。

こうしたさまざまな闘いがありながらも、リンジーの姿勢は、常に「バランスをとること」にあった。彼女の考える専門職としてのソーシャルワーカーは、人種を超えるものでなくてはならず、養成教育においても「黒人のための」とか、「黒人～」といったテーマを科目名称とすることを許さなかった。彼女が求めるものは、黒人のみではなく、「全ての人」にとって与えられるべきものであ

り、教授陣を採用するときにも、その点を重視し、「どのような人も受け入れる」資質を持つことを条件とした。そして、「人間性の優れた上司」の下で働くことをよしとし、女性の上司の下で男性が働くことや、黒人の上司の下で白人が働くことを気にしない人を求めたのであった〔Oral History 1979 : 212-213〕。

1967年ハワード大学を引退した後、リンジーは、連邦政府の保健教育福祉省の特別顧問、連邦議会上院の高齢者問題委員会専門委員を務めた。またNULや全国高齢者協議会の理事などを歴任した。1974年、全米ソーシャルワーカー協会の首都ワシントン支部は、彼女を「Social Worker of the Year」として表彰した。

本稿では、公民権運動の前夜を中心に取り扱ってきたため、残念ながら公民権運動との関係を十分に著述することができなかった。今日、ハワード大学社会事業学校は、博士課程を有する全米でも指折りのソーシャルワーカー養成校となっている。リンジー亡き後も、黒人コミュニティのニーズに配慮し、それに応えることを大切にしつつ、多様なマイノリティの包摂とユニバーサリティを失わない姿勢を保っている。そして、個人の幸福と充実した生活のために、教育研究の現場における知識、価値と技術を常に高めていくことに努力しているのである<sup>(51)</sup>。

## 注

(1) Abraham Flexner (1866-1959)。彼が1910年に発表したFlexner Reportは、全国の医学部教育の質を評価したもので、その結果、田舎の医学校や黒人系医学校のほとんどが廃校に追い込まれた。この会議が開催された1915年当時は、ロックフェラー財団教育部に勤務しており、高等教育機関の教育の質向上について研究をしていた。フレックスナーが専門職に課した5つの条件（英語）は、以下の通りである。

1. It must engage in intellectual operations involving individual responsibility
2. Derive its knowledge from science and learning
3. Apply its knowledge with techniques that are educationally communicable
4. Be self organized
5. Operate from altruistic motivation

- (2) 1893年の第一回慈善矯正博愛会議では、博愛学 (Philanthropology) として専門的学問体系を確立し、その教育を施そうとするエイモス・ウォーナー (Amos Warner) の意見もあった。しかし、本格的に動き出したのは、1897年の慈善矯正全国大会で、メアリー・リッチモンドが専門訓練の嘆願書を提出したことが元になっている (西崎緑 (2009) 『黒人系大学におけるソーシャルワーク教育の歴史的研究—白人系大学との比較』 pp.6-7.)
- (3) 1年コースとなったときの名前は、ニューヨーク博愛事業学校 (New York School of Philanthropy) であった。
- (4) Charity Organization Society of City of New York (1915) *Bulletin of the New York School of Social Work: Directory of Students 1898 - 1915*. Vol. VIII No.2より。
- (5) 近年のアメリカ史の著述方法では「黒人」ではなく「アフリカ系アメリカ人」を用いている。しかし本稿では、Historically Black Colleges and Universities (HBCU) の和訳として「歴史的黒人大学」または単に「黒人大学」という表記を用いたりしているため、「黒人」という表記を用いることとする。
- (6) 社会事業が黒人の救済に熱心ではなかったことは、Laschi-Quinn, Elisabeth (1993) *Black Neighbors: Race and the limits of reform in the American settlement house movement, 1890-1945*. Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press.やClarlton-LaNey, Iris “The Career of Birdye Henrietta Haynes, a Pioneer Settlement House Worker.” *Social Service Review* Vol. 68, No. 2 (Jun., 1994), pp. 254-273などに記載されている。
- (7) 20世紀前半の人種暴動の中でも特に大きいものとして記録されているのは、以下の7つである。Wilmington, N. C. (1898), Atlanta, Ga. (1906), Springfield, Ill. (1908), East St. Louis Ill. (1917), Chicago, Ill. (1919), Tulsa, Okla. (1921) and Detroit, Mich. (1943).
- (8) スプリングフィールドの人種暴動については、James L. Crouthamel, “The Springfield Race Riot of 1908,” *The Journal of Negro History* Vol. 45, No. 3 (Jul., 1960), pp. 164-181.などの記述がある。8月14日から15日の2日間にわたる暴動で、2人の黒人がリンチで殺され、その他殺害された黒人は少なくとも4人、それ以外にも多数の負傷者が出た。また放火等でUS\$200,000相当の財産が破壊されたと言われている (そのほとんどが黒人所有のものであった)。
- (9) 1909年メアリー・オーヴィントン (Mary White Ovington), オズワルド・ヴィラード (Oswald Garrison Villard), ウィリアム・ウォーリング (William English Walling) andヘンリー・モスコウィッツ (Dr. Henry Moscowitz) が人種問題を討議するために呼びかけ、六十数人のメンバー(そのうち7人はデュボイス, アイダ・B・ウェルズ・パネット, メアリー・チャーチ・テレルなどの黒人) が集まったことがNAACPの設立につながった。初期からのメンバーは、Joel and Arthur Spingarn, Josephine

- Ruffin, Mary Talbert, Inez Milholland, Jane Addams, Florence Kelley, Sophonisba Breckinridge, John Haynes Holmes, Mary McLeod Bethune, George Henry White, Charles Edward Russell, John Dewey, William Dean Howells, Lillian Wald, Charles Darrow, Lincoln Steffens, Ray Stannard Baker, Fanny Garrison Villard, Walter Sachsなどである。http://www.naacp.org/pages/naacp-history.
- (10) Ruth Standish Baldwin は、ニューイングランド地方の古い入植者家系に生まれ、スミス・カレッジの卒業生であった。彼女は、鉄道会社の経営者であったウィリアム・ボールドウィンが1905年に亡くなった後、その遺志を継いで黒人移住者の健康と生活を支える事業に熱心に取組み、人種平等の社会実現を目指した。“Let us work not as colored people nor as white people for the narrow benefit of any group alone, but together, as American citizens, for the common good of our common city, our common country.” – Ruth Standish Baldwin
- (11) George Edmund Haynes (1880–1960)は、アーカンソー州パインブラフに生まれ、1903年フィスク大学で学士を、1904年イエール大学で修士を取得、さらに1912年には黒人として初めてコロンビア大学で博士号を取得した。彼はフィスク大学社会学部長(1910年より)を経て、合衆国労働省やキリスト教団体でも業績を残した。1918年にEugene Kinckle Jonesに引き継ぐまで、彼は、全国都市同盟の前身、National League on Urban Conditions Among Negroesの事務局長を務めた。
- (12) 他の2つは、Committee for the Improvement of Industrial Conditions Among Negroes in New York (founded in New York in 1906)とNational League for the Protection of Colored Women (founded in 1905)であった。
- (13) 第一次大戦によって、ヨーロッパからの移民による低賃金の労働力が著しく不足したため、それを補うために南部から黒人が大量に北部の都市に流れ込んだ。
- (14) Howard Universityは、南北戦争終了直後の1867年、合衆国議会は黒人のために学芸と医学を学ぶ大学を創設することとし、解放民局のハワード将軍 (General Oliver Otis Howard) を記念してハワード大学と命名された。(実際、ハワード将軍は、1869～74年学長を務めた。) 以後、黒人大学の名門として、多くの医者や弁護士、公民権運動活動家等を輩出している。(ワシントンD.C.にキャンパスを持つ。)
- (15) (1863–1939)。数学者。サウスカロライナ州ウィンズボロに生まれ、1886年ハワード大学を卒業した。その後、ミラーはジョンズホプキンス大学に入った最初の黒人として数学、物理学、天文学の勉強を1889年まで続けた。1890年、ミラーはハワード大学で教鞭をとり始め、1895年には同大学で最初に社会学を取り入れた。1934年まで社会学担当教授として教鞭をとったほか、1907年には、ハワード大学学芸学部の学部長となり、自然科学と社会科学の水準上げを目指したカリキュラムの改革を行った。ミラーは、黒人に対する教育は、学術と職業教育の両方を合わせた総合的なもので

- なければならない、という考えを持っており、児童の教育にも力を入れていた。  
<http://afam.nts.jhu.edu/people/Miller/miller.html> 2015年5月23日取得。
- (16) ハワード大学社会事業学校 (Howard University School of Social Work) のホームページ (<http://www.howard.edu/schoolsocialwork/about/history.htm>) に記載されている歴史を見ると、1914年ころには、社会サービスの授業が行われていたと記されている。これを、Moorland-Spangarn Research Center所蔵のハワード大学の授業概要で調べた結果、該当する授業は、ミラー教授の授業であることがわかった。
- (17) 当初、専門的知識と技量を持ったソーシャルワーカーや宗教的ワーカーの養成需要も大きかったが、教師・牧師・医者をはじめとする専門職にも、黒人の家庭を相手にするためには、経済学、社会学の理論と実践技術の習得が必要であった。(フィスク大学授業概要1910-1911, p.41)
- (18) John A. Kayser, "The Bishop Tuttle School of Social Work and the Life of Fannie Jeffrey: An Oral History" *Reflections: Narratives of Professional Helping*, 10(1), 111-126.
- (19) Lucy Diggs Slowe (1885-1937) 1908年に黒人初の女子学生クラブをハワード大学で設立した9人の一人。コロンビア大学学芸修士号を取得した後 (1915)、教育学部において勉強を続け、1922年ハワード大学初の女性部長となった。15年間の女性部長時代に、大学内の女子寮の設置、学力向上、健康状態の向上に尽力した (Perkins 1996)。
- (20) (1894-1962)。メリーランド州ボルティモア生まれ。1920年ニューヨーク社会事業学校の研究生となった。1921-22年デンマークに滞在。帰国後、アトランタのモアハウス大学で社会学を教えながら、アトランタ社会事業学校の校長を務めた。1927年に出版した"The Pathology of Race Prejudice" (人種的偏見の病理学) が問題視され職を解かれた後、シカゴ大学で研究をつづけ、1931年に博士号を取得した。1934年ハワード大学に移り、社会学を教授した。
- (21) <http://www.howard.edu/schoolsocialwork/about/history.htm> 2015年5月25日取得
- (22) 次男のRandolfは小学校の校長、長女のLeolaは、リンカーン師範学校を卒業して教師になっている。
- (23) Lindsayの生涯については、彼女への2つのインタビュー、Oral History of Dr. Inabel Burn Lindsay Conducted by Dr.Harold Green Logan (former student) June, 29, 1982. Moorland-Spangarn Research Center, Howard University, Washington, D. C.及びNASW Oral History Project/ Interviewer: Vida S. Grayson, June 28, 29, 1979. を参照した。
- (24) W.E.B.DuBois :NAACP機関紙Crisis編集主幹、アトランタ大学教授 (社会学) を歴任。
- (25) 当時、人種隔離のためにデュボイスのような有名人も黒人家庭に宿泊したので、彼

- 女の姉も夫が歯科医であったことからそのような役割を仰せつかったようである。
- (26) ただし、Dr. McNairだけは、彼女を能力が足りない黒人女学生として扱ったと言っている。
- (27) 当時、都市同盟奨学生は3～4人程度で、フレイジャーはその最年長として年下の学生の面倒を公私にわたってよく見てくれたという。
- (28) Milford Conferenceの編集者であり、リンジーもニューヨーク時代に教えをうけた、Porter Raymond Lee (1879-1939) は、ケースワークを基礎としたジェネリック・ソーシャルワークを追求し、自ら開発した「ケースメソッド」教授法を用いてソーシャルワーカー養成訓練を行った。
- (29) Marion E. Kenworthy, M.D. (1891-1980) は、ソーシャルワーク教育に初めて精神医学的知見を導入した精神科医。1919年にボストンからニューヨークに移り、YWCA中央衛星学校で保健体育教師の養成にあたった。同時にグルーク医師の招きで、ニューヨーク社会事業学校で講義を行うこととなった。1929年には、ニューヨーク社会事業学校の校長ポーター・リーとともにフロイトの精神分析理論に基づいたソーシャルワークの最初の教科書、*Mental Hygiene and Social Work*を出版した。
- (30) Bernard Charles Glueck, Sr. (1884-1972) は、アメリカの刑務所内精神科診療所を最初に開設した人物。1919年にニューヨーク社会事業学校で最初に「社会精神医学」の授業を担当した〔Cnaan, Ditcher, and Draine 2008: 〕。弟とその妻 (Sheldon and Eleanor Glueck) は、少年非行を生涯にわたって精神分析理論に基づいて研究した。
- (31) Gordon Hamilton (1892-1967) Hamiltonは、リンジーが入学した1920年に、健康上の理由からコロラド・スプリングスの赤十字家族サービスを辞めてから、メアリー・リッチモンドの推薦によってニューヨークCOSの研究事務の職に就いていた。そして、1923年からニューヨーク社会事業学校の教員となった。
- (32) リンジーは、ハワード大学の教師であったCurley氏と一緒にアパートを借りた。
- (33) Creweらによると、「母の病気のため」とあるが、リンジーの語ったところによれば、母が彼女を呼び戻そうとしてすでに教職を見つけていたので、自分の希望を述べずに従ったという。
- (34) Charles Johnson (1893-1956)。社会学者。全国都市同盟の研究所で人種関係の研究を行った。1926年にフィスク大学に赴任し、ジョージ・ヘインズの後任としてフィスク大学の社会学部を發展させた。
- (35) Lower East Sideは、ヨーロッパからの移民地区 (当初は、アイルランド人、ドイツ人、ポーランド人、その後、ユダヤ人、ウクライナ人等) で、多くの住民は低所得者であった。Henry Street Settlementや、University Settlement Houseなどの主要なセツルメントもこの地区にあった。
- (36) セントルイス時代の別のエピソードとしては、アメリカソーシャルワーカー協会

- (NASWの前身) 州部会での出来事がある。黒人は会長になれず、書記を務める慣習となっていたため、リンジーも書記となるしかなかった。彼女は、人種差別に抗議する手段として、会議においてわざと非常に拙い報告を行ったのであった〔Crewe, Brown and Gourdine : 367〕。
- (37) Julius Rosenwald (1862-1932)。シアーズ・ローバックの経営者であった彼は、1917年に基金を設置し、黒人の教育環境の改善のために南部の黒人学校に多額の寄付を行った。
- (38) Sophonisba Breckinridge (1866-1948) 法学者。弁護士資格を持つ彼女は、ハルハウスに住み、シカゴ大学で教授する傍ら、児童・貧困問題の解決をめざす社会活動家でもあった。彼女は、1928年第一回国際社会事業会議に、合衆国代表者として参加した。
- (39) このあたりの状況は、Andrew Morris (2008) *The Limits of Voluntarism: Charity and Welfare from the New Deal through the Great Society*. Cambridge University Press. に詳しく記載されている。
- (40) Edith Abbott (1876-1957)。経済学者。児童局長となった妹のグレースとともに、児童福祉、貧困問題、移民問題、女性問題の解決に取り組んだ社会改革者でもあった。1924年にシカゴ大学社会サービス運営管理学校校長となった。
- (41) Brownsville Affair (1906)。テキサス州に配属された黒人部隊が地元白人からパーティーの射殺の濡れ衣を着せられた事件。セオドル・ルーズヴェルト大統領は、確かな証拠に基づかずに黒人兵全員を除隊処分としたため、黒人たちとの間に禍根を残した。
- (42) Charlotte Towle (1866-1966)。人間の内的成長と環境の関係について考察し、クライアント中心ソーシャルワークの手法を開発した。これによって、行動科学に基づいたさまざまな支援をソーシャルワーカーが展開できるようになった。*Common Human Needs*は、社会保障法下の公的扶助ワーカーのために彼女が作成したマニュアルであるが、後に社会主義書籍と見られ出版禁止処分となった。この処分をめぐっては、社会事業諸団体から政府に対して抗議が殺到した。
- (43) シカゴ大学での修士課程を1年で終えた彼女は、シカゴの精神病院の社会サービス部長に推薦されていたが、彼女は敢えてハーワード大学に行く道を選んだ〔Crewe, Brown and Gourdine : 368〕。
- (44) リンジーは、ノルウェーやスウェーデンの社会事業学校が現場経験1年以上を入学条件に課している理由が当初よくわからなかったが、後に、学生が貧困者を理解する上で必要だと気付いたと言っている。
- (45) ニューヨーク社会事業学校もその条件を免れず、1940年、ついにコロンビア大学の一部となった〔Kendall : 39〕。



- (46) ハワード大学全体で見ると、1946年夏に776人の復員兵が入学しており、さらに秋には1000人の復員兵が入学した〔Hunter 1994 : 67, 西崎2012 : 70〕。
- (47) Mordecai Wyatt Johnson (1891-1976)。1926-60年ハワード大学の学長職を務めた。ジョンソンは、ハワード大学では黒人初の学長であり、優秀な黒人の学者を招聘することや、教養部を強化すること、寄附金を増やすことなど、ハワード大学を一流大学に発展させることに多大な貢献をした。彼は、20世紀初頭の3大黒人牧師の一人でもあり、優れた演説家でもあった。
- (48) 新しい時代に即した社会事業専門職養成教育の最低基準を定めるために、全米の社会事業学校および社会事業の現場双方から実態や要望を細部にわたって調査する大掛かりな研究が、カーネギー財団から31,000ドルの助成金を得たことにより可能となった。この研究の首席研究者は、連邦教育局高等教育部長であったホリス (Ernest V. Hollis) であり、彼を補佐するために、連邦社会保障局公的扶助課からテイラー (Alice Taylor Davis) が副主任研究者として参加した。この研究は、1948年10月1日から開始され、1951年12月に報告書が出版された。Katherine A. Kendall, Council on Social Work Education: Its Antecedents and First Twenty Years (Alexandria, VA: the Council on Social Work education, 2002), 61-65.なお、ホリス=テイラー報告の内容は、Hollis, Ernest V. and Taylor, Alice L. (1951) *Social Work Education in the United States: The Report of a Study Made for the National Council on Social Work Education*. Columbia University Press.参照。
- (49) NSWAは、社会事業界の中の様々な全国組織を束ねる役割を担った団体である。NSWAの前身は、1923年に設立された全国社会事業協議会 (the National Social Work Council) であり、民間社会事業の全国団体の情報交換や共通課題についての討議を行う会合を開催することを目的として設立されたものであった。それが戦後、より広範囲の公私の各種団体の参加を求めるという意志決定をしたため、1946年に39団体 (民間団体30, 政府機関9) を傘下におさめるNSWAが設立されたのである。
- (50) First Meeting of National Social welfare Assembly, April 29, 1946. p.28.
- (51) ハワード大学社会事業学校ホームページより。  
<http://www.howard.edu/schoolsocialwork/about/history.htm> 2015年5月20日取得。

#### 参考文献

- Brown, Annie Woodley, Gourdine, Ruby Morton and Crewe, Sandra Edmonds (2011)  
"Inabel Burns Lindsay: Social Work Pioneer Contributor to Practice and Education through a Socio-cultural Perspective." *Journal of Sociology & Social Welfare* 38. 143-161.
- Cash, Floris Barnett (2001) *African American Women and Social Action: the*

- Clubwomen and Volunteerism from Jim Crow to the New Deal, 1896-1936.* Greenwood Press.
- Cnaan, Ram A., Dichter, Melissa E. and Draine, Jeffrey (2003) *A Century of Social Work and Social Welfare at Penn.* University of Pennsylvania Press.
- Crewe, Sandra Edmonds, Brown, Annie Woodley and Gourdine, Ruby Morton (2008) "Inabel Burns Lindsay: A Social Worker, Educator, and Administrator; Uncompromising in the Pursuit of Social Justice for All." *Affilia: Journal of Women and Social Work.* 23(4). 363-377.
- Herbold, Hilary (1994) "Never a Level Playing Field: Blacks and the G.I.Bill." *Journal of Blacks in Higher Education.* 104-105,107, 108.
- Holis, Ernest V. (1949) "Progress Report on the Study of Social Work Education." *Social Work Journal.* January 1949. Reprint.
- Hunter, Gregory (1994) "Howard University:"Capstone of Negro Education" During World War II." *Journal of Negro History* 79(1). 54-70.
- Kendall, Katherine A. (2002) *Council on Social Work Education : Its antecedents and first twenty years.* Council on Social Work Education.
- Lindsay, Inabel B. (1941) "Negroes and National Conference of Social Work." *Opportunity.* 19. 269-271.
- Lindsay, Inabel B. (1946) "Social Work on Trial." *African American.* 1946 Summer. 16-17, 30-31.
- Lindsay, Inabel B.(1979) National Association of Social Workers Oral History, Interviews, by Vida S. Grayson.
- Lindsay, Inabel B. (1982) Oral History Conducted by Dr. Harold Green Logan. (Moorland-Spingarn Research Center, Howard University)
- Matthews, L. M. (1976) Portrait of a Dean: A biography of Inabel Burns Lindsay, first dean of the Howard University School of Social Work. Unpublished doctoral dissertation, University of Maryland, College Park.
- Perkins, Linda M. (1996) "Lucy Diggs Slowe: Champion of the Self-Determination of African-American Women in Higher Education." *The Journal of Negro History*, Vol. 81, No. 1/4. 89-104.
- Reich, Michael and Andrews, Janice (2001) *The Road Not Taken: A History of Radical Social Work in the United States.* Routledge.
- Stadum, Beverly (1999) "The Uneasy Marriage of Professional Social Work and Public Relief, 1870-1940." in Lowe and Reid, *The Professionalization of Poverty.* 29-49.
- 一番ヶ瀬康子 (1963) 『アメリカ社会福祉発達史』 光生館.
- 西崎 緑 (2008) 「黒人系大学におけるソーシャルワーク教育の歴史的研究—白人系大学

アイナベル・リンジーと草創期の黒人ソーシャルワーカー養成教育

との比較」『平成18年度・19年度科学研究費補助金研究実績報告書基盤研究（C）課題番号18530434報告書』

西崎 緑（2012）「G.I.Billと黒人」『福岡教育大学紀要第60号第2分冊』History- Howard University School of Social Work <http://www.howard.edu/schoolsocialwork/about/history.htm> 2015年5月20日取得

付記

本稿は、科研「黒人系大学におけるソーシャルワーク教育の歴史的研究—白人系大学との比較」（2006～2007年度）および「公民権運動におけるNCNWの役割～ドロシー・ハイトを中心に～」（2013～2016年度）による研究成果の一部をまとめたものである。